

3-4 ふだんからの準備・いざというときの避難

自然災害からいのちを守るために、わたしたちひとりひとりができることは何だろう。

■ふだんから心がけておくこと

自然災害には地震のように突然やってくるものと、大雨で起きる洪水のように、あるていど予測できるものがあります。しかし、どんな災害のときでも、ふだんから備えをしておけば、いざというとき落ち着いて行動することができ、被害を少なくすることができます。

●自然災害について正しい知識を身につける

大雨のとき、川の下流では浸水が心配ですが、上流ではがけ崩れや土石流に注意しなければなりません。

災害はどうやって起きるのか、どんな場所でどんなことが起きるのか、正しく知っていれば、どこにいつ避難するのが安全なのかがわかります。



●身のまわりに危険なところがないか調べる

住んでいる地域の危険な場所をハザードマップ(18ページ)などで調べたら、家のまわりや通学路など、もっと身近なところにも危険な場所や物がないか調べてみましょう。

例えば、地震のとき倒れそうなブロックべい、大風で落ちそうな看板、ふたのない側溝など、知っていれば、避難するとき注意することができます。

●気象情報や避難情報に注意する

特に雨が降っているときは、テレビやラジオの気象情報で、注意報や警報が出ていないか確認しましょう。地域の防災無線の避難情報にも注意しましょう。

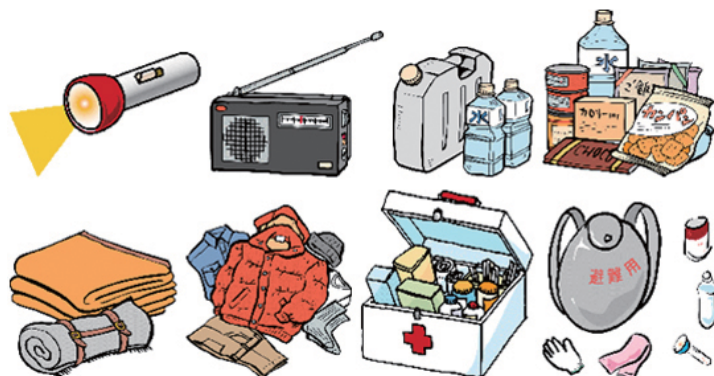


●避難場所や連絡先を家族で決めておく

家族がいつもいっしょにいるとは限りません。いざというとき、どこに避難するのか、家族と離ればなれになったときだれに連絡するのか、家族で話し合っ決めておきましょう。連絡先は、近くに住む人と、離れたところ(よその県など)に住む人の2箇所以上を決めておくといいでしょう。

●非常持ち出し袋を用意する

必要なものは、それぞれの家庭によってちがうので、用意するものは家族で話し合っ決めてみましょう。そして、いざというとき、すぐ持ち出せる場所に袋をおきましょう。



■早め早めの避難で身を守る

災害の危険や不安を少しでも感じたら、たとえ注意報や警報(20、21ページ)が出ていなくても、早めに避難しましょう。災害がせまってからでは、あわててしまって正しい判断^{はんだん}ができないこともあります。

●避難は明るいうちに

夜、外が暗くなってからの避難は、まわりが見えないためたいへん危険です。みんなで明るいうちに避難しましょう。



●お年寄りの避難は特に早めに

お年寄りや、からだが不自由な方など、避難に手助けが必要な人は、地域の人々で協力して、早めに避難できるようにしましょう。



●あなたが先立って避難

ひとりでの避難は危険です。できるだけ保護者^{ほごしや}や近所の人といっしょに避難しましょう。

避難したがない人がいるときは、まずあなたが行動してください。そうすれば、みんなもついてきます。



●^{ながくつ}長靴より運動靴で

荷物はリュックに入れて背負い^{せお}、動きやすい服装^{ふくそう}で避難します。長靴は、地面が水につかっている場合は、中に水が入って歩けなくなるので、運動靴^{あぶ}をぬげないようにしっかりとしましましょう。物をつかんだりするときに危なくないよう、手袋もむすれずに。

●^{きんぎゆう}大雨の緊急避難には ^{つえ ぼう}杖や棒をもって

大雨で道路に水があふれているとき、にごった水は深さがわかりません。側溝やマンホールのふたがはずれていても見えません。そういう場所では杖や棒、それがなければ傘^{かさ}を突いて歩きましょう。

ただし、流れる水がひざまで来るようなときは、歩いて避難するのは^{こんなん}困難です。

●どうしても避難所までいけないときは～命を守る行動～

災害がさしせまっていて、どうしても避難所まで行けないときは、家のすぐ近くに鉄筋コンクリートの^{てっきん}がんじょうな建物があれば、そこへ逃げましょう。それも無理なときは、できるだけ家の2階以上の、がけから遠い部屋に避難しましょう。



ここに書いた避難時の注意は、大雨が降って土砂災害や水害の発生のおそれがある場合です。大地震で津波^{つなみ}が起きるおそれがある場合には、たとえひとりでも、夜で外が暗くても、すぐに高台に避難しましょう。